

万博とカジノと夢洲

2025年万博が日本・大阪に決定して1週間。新聞も「お祝い」一色から、山積する課題を提起する記事も見られるようになった。新聞各紙を読み、大阪「カジノ万博」について考えることも多い。とりわけ印象に残った記事を、これから紹介していきたい。まずは11月25日の朝日・読売・毎日から。

写真は10月8日に咲洲の「コスモタワー」55階展望台から撮った、埋立て中の夢洲。この人工島・夢洲でカジノと並んで、万博を開催する計画だ。

この夢洲について、朝日新聞の「天声人語」が次のように語っている。

大阪の海岸にちなむ歌が、百人一首にある。〈住の江の岸による波よるさへや夢の



かよひ路人めよくらむ〉。夜、夢の中であなたに会いに行くのに、どうして人目をはばかってしまうのだろう。大阪の人工島「夢洲」は、この歌から名付けられた▼

悲しい恋の歌に似て、夢洲も不遇が続いた。大阪で五輪を開き選手村にしようとしたが、招致に失敗した。大規模なビジネス街にする計画を立てたが、うまくいかなかった。長い苦難の末の万博である▼

2025年の万博が大阪市に決まり、夢洲が会場となる。「二度と負の遺産なんて言わせない」とは、大阪府の松井一郎知事の言葉だ。人工島がお荷物でなくなるのが、よほどうれしかったのだろう。55年ぶりの大阪開催となる▼

今となっては古き良き思い出のような前回の大阪万博だが、当時も疑問の声はあった。「財界と政府だけが独走して、いつのまにか開催がきまり、いつのまにか会期がせまってくる。これだけの莫大な金を、もっとまじな公共事業に注ぎ込んだら……」▼

評論家の針生一郎氏が「朝日ジャーナル」に寄稿していた。高度経済成長のなか、かき消された批判かもしれない。むしろ現在の方が当てはまるか。万博を喜んでいいのかどうか、正直いって分からない▼

インフラや会場の整備に2千億円ほどかかり大半は税金だという。万博が終われば、夢洲の主演はカジノに変わりそうだ。「いのち輝く未来社会のデザイン」。そんなテーマの裏にある現実である。

読売新聞社説

「大阪府と大阪市は会場の隣接地で、カジノを含む統合型リゾート（IR）誘致を計画する。事業者には、地下鉄の延伸など周辺整備費の一部負担を求める構えだ。

万博とギャンブルを一体的に捉える姿勢は大いに疑問である。」

毎日新聞「IR 一体 もろ刃の剣」

2 大事業がほぼ同時に進行することに伴う課題も多い。建設労働者の人手不足は、長期化することが予想されており、万博と IR で工事時期の調整が必要となる可能性がある。さらに IR 実施法の成立が遅れた影響などで、IR の 24 年開業という目標も不透明な面がある。IR の開業が万博開催よりも大きく遅れると、集客面での相乗効果が低下する恐れがある。

また、万博や IR の来場者など需要が想定を大きく下回った場合は、事業規模が大きいだけに、過剰投資となって夢洲が負の遺産になるリスクもある。IR の中核施設となるカジノに対し、市民の間ではギャンブル依存症など懸念も根強い。

(2018 年 12 月 3 日)